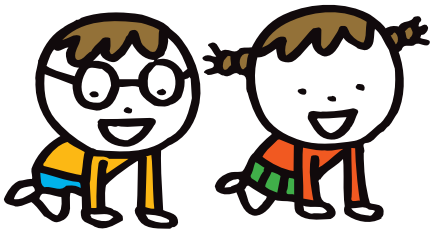
〈原始〉

住吉は、米づくりと漁業のムラだった



住吉区ゆかりのキャラクター２
農民

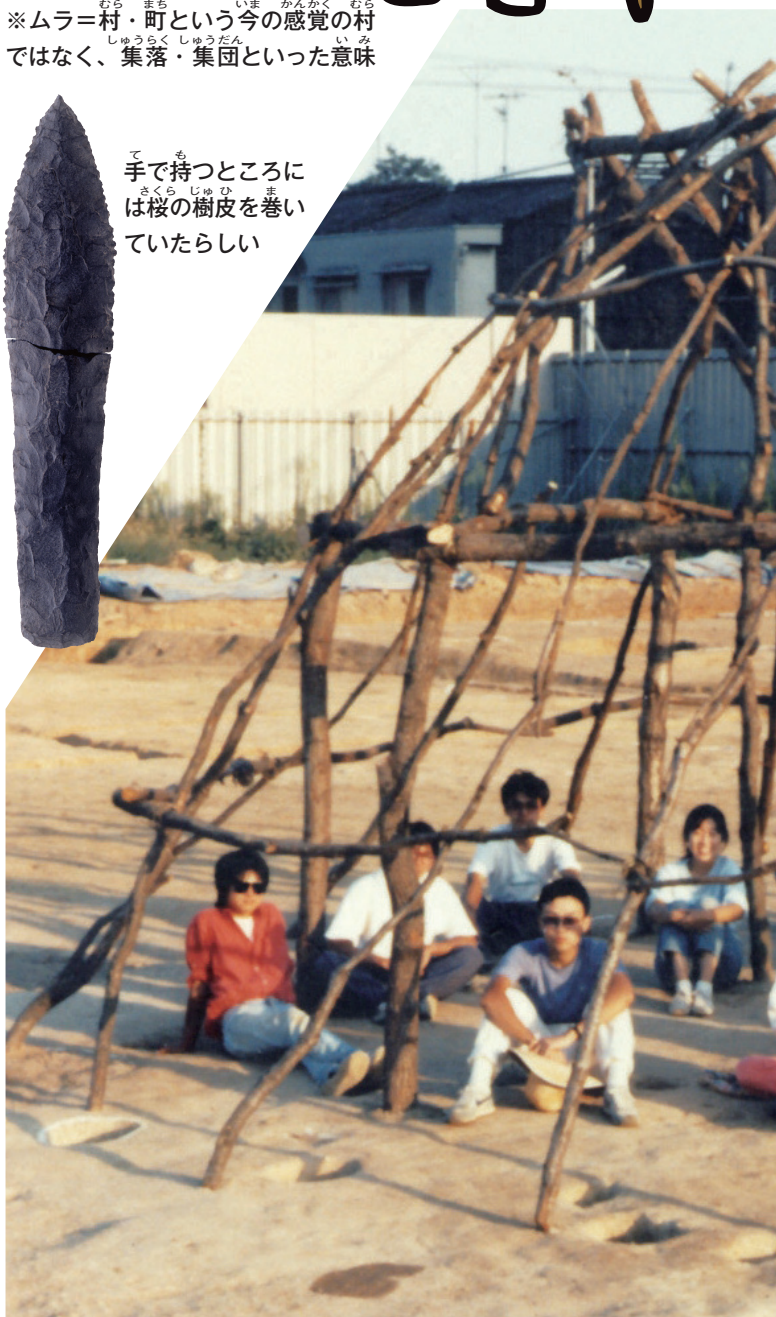
２千5百年前には、山之内4丁目の一帯に畑や田んぼで農作物を作って暮らすムラ※ができました。家は地面を丸く掘って土間にして、その上に屋根を伏せたような形の竪穴住居でした。床の真ん中に料理を作るために火を焚く炉があり、その周りで家族みんなが食事をしたり、今日一日の話をしていたことでしょう。当時、ムラのすぐ西側は海だったので、大阪湾でとれるイイダコを取るためのタコ壺も出土しています。食事のおかずにはタコや魚などの料理が多かったにちがいありません。

また、弓の矢の先につける石の鏃や槍先・剣などの武器となる石器をさかんに作っていたようで、つくりかけの石器やかけらがたくさん出土しています。このムラの人たちは石の武器を持つことが必要だったようです。

このムラのすぐ近くにはお墓もつくられていました。溝で四角く囲まれた中にお棺を埋め、溝の中には葬式で使った土器が置かれていました。同じようなお墓はJR阪和線東側の大阪公立大学グラウンドでも見つかっています。ムラは弥生時代の後半にあたる1千9百年ほど前に姿を消しています。ムラ人たちがどこへ行ったのか、それはいまだに謎です。

※ムラ＝村・町という今の感覚の村ではなく、集落・集団といった意味

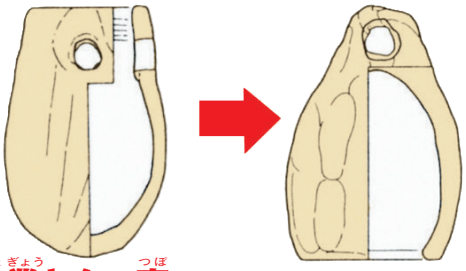
手で持つところには桜の樹皮を巻いていたらしい



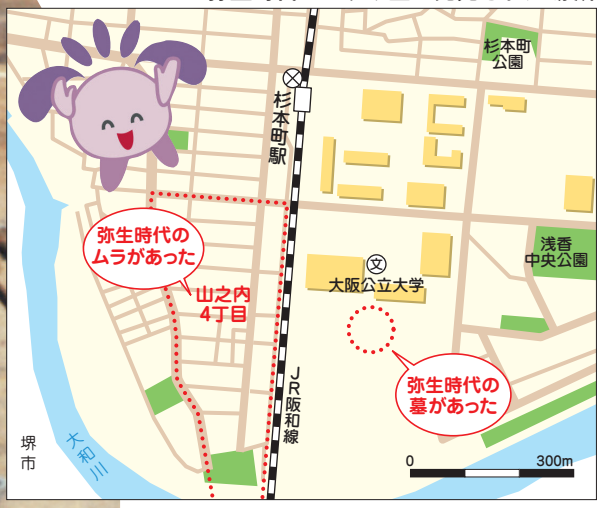
住吉区ゆかりのキャラクター３
漁師

山之内遺跡の竪穴住居跡。柱を立てて住居の骨組みを復元

タコ壺と網につける錘。漁が盛んに行われた



網漁業とタコ壺

弥生時代から奈良時代にかけて住吉区の遺跡からは漁業につかわれる道具が多く出土します。土製の錘は古墳時代から多く出土するようになります。直径4.5cmほどの筒形をしており、曳き網のロープの部分につけられます。こうした曳き網漁は何艘もの船で力を合わせて行います。ひとりで漁をしていた時代から、多くの人たちが共同で漁をするようになったのです。また、弥生時代からイイダコを捕るタコ壺が見つかっています。弥生時代のタコ壺はコップ形で口のところに紐を通す穴が一つ開いています。古墳時代になると紐を通すところが底に付けられた釣錘形に変わります。この形のタコ壺は現在も使われています。

弥生時代のムラや墓が発見された場所